

阿岐のまほろば

Vol. 35

高屋町の古墳から鉄剣を発見!!

高屋東2号遺跡 （高屋町 高屋東）



写真1

鉄剣出土状況

高屋東2号遺跡は、JR西高屋駅から東へ約2kmの高屋町高屋東に所在し、入野川南岸の標高227～233mの丘陵上に位置しています。発掘調査は、一般国道375号（東広島道路）道路改良事業に伴い、平成18年5月から平成19年2月まで実施しました。調査の結果、弥生時代の土坑墓50基、古墳13基、溝状遺構1などを検出しました。

古墳群は、丘陵の頂部から斜面にかけて近接して築造されています。古墳の墳丘は直径4～7m、高さは0.1～0.3mの円墳で、周溝が巡っています（写真2）。埋葬施設は主に箱式石棺でしたが、いずれの古墳も既に盛土が流失して、多くは蓋石が失われているという状況でした。石棺の規模は概

ね長さ2m、幅0.5mです。主軸は東西方向で、頭位は東に置いていたと考えられます。第1号古墳の埋葬施設には、頭骨の一部が残っていました。また、概ね1古墳につき1基の割合で、古墳の周溝内に小規模な石蓋土坑墓が存在しており、葬られた人との関わりをうかがわせています。

遺物は、第1号古墳の東側周溝から鉄鎌、第3号古墳の北側斜面から須恵器 甕（写真3）などが出土しています。

第7号古墳は直径約4mの円墳で、墳丘の高さ0.2m、周りを巡る周溝は幅0.7mです。埋葬施設は、主軸を東西にもつ箱式石棺（写真4）で、規模は長さ1.5m、幅0.8m、深さ0.6mです。蓋石



第6号古墳

写真2

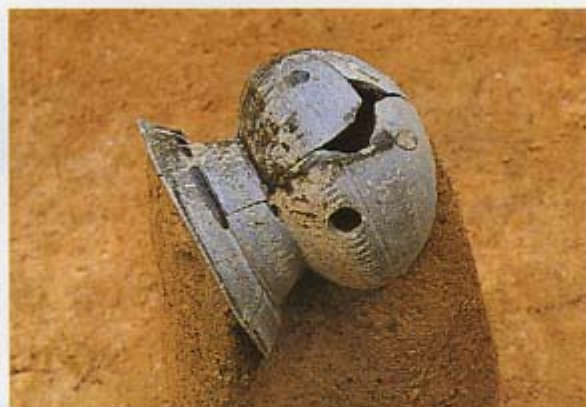
上には、拳大の石を目地変わりに多量に積み上げていました。遺物は、東側の頭位にあたる部分から管玉、^{なづめ} 棗玉が出土しました。

第12号古墳は直径5.5mの円墳で、墳丘の高さ0.3m、周溝は幅1.1mです。埋葬施設は、主軸を東西にもつ箱式石棺で、規模は長さ1.8m、幅0.7m、深さ0.2mです。写真1の鉄剣は、石棺内の中央部北隅に剣先を西側に向けて置かれていました。鉄剣は長さ67cm、幅3cmで、一か所折れています。



高屋東2・3号遺跡位置図（1：25,000）

1 高屋東2号遺跡 2 高屋東3号遺跡



出土状況

写真3



第7号古墳 埋葬施設

写真4

本古墳群は、それぞれの古墳が近接して築造されていることから、葬られた人々の生活地域が同じ場所であったことが考えられ、血縁関係のある一族の墓地であったのではないかと考えられます。築造時期は、出土遺物から5世紀代と推定されます。

調査区西側斜面からは、弥生時代の土坑墓が数多く確認されましたが、丘陵頂部にはまったく確認できず、古墳群との重複は見られませんでした。土坑墓の大きさは、長さ0.5～2m、幅0.3～0.5mで、主軸は等高線に並行しているものがほとんどでした。土坑墓のなかには、墓標石と思われる石や弥生土器を伴うものがありました。弥生土器の器種は壺形土器で、脚付のものもありました。時期は、弥生時代中期と推定されます。

本遺跡の周辺には、^{かどむかいやま} 鍵向山石棺群・^{きほらむかいやま} 木原向山古墳群など多くの遺跡が存在しており、当該地域の弥生時代から古墳時代の墓制を考える上で貴重な資料を得ることができました。（植田）

「移動」から「定住」へ!!

高屋東3号遺跡 (高屋町郷・高屋東)



平成17年度調査区空中写真 写真5



SB 8~11 写真6

高屋東3号遺跡は、入野川南岸の標高227~233mの丘陵上に位置しています。高屋東2号遺跡からは、南側に約50m離れた場所にあります。発掘調査は、高屋東2号遺跡と同様に一般国道375号（東広島道路）道路改良事業に伴うもので、平成17年5月から平成19年3月まで2か年にかけて実施しました。

調査の結果、弥生時代の竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡1棟、動物などを捕獲するための落とし穴と考えられるものを含む土坑6基、土坑墓11基、溝状遺構5条のほか性格不明遺構20数基など多くの遺構を検出しました。

最も古いものは、調査区中央部の住居跡状遺構で、弥生時代前期頃と考えられます。規模は直径2mと小型で、中央と周囲に浅い柱穴状の穴があり、簡単な構造の住居であったと思われます。遺

物は弥生土器、管玉、石鏃、石包丁などの石器と数多くの剥片・削片が出土しており、石器工房の可能性もあります。この住居は落とし穴（写真7）と同時期と思われる、狩猟を主とした移動の多い当時の生活をうかがわせています。



落とし穴 写真7

調査区北側や南東側では、弥生時代中期頃の直径3～4m、2本柱の竪穴住居跡が確認されており、後期になると、竪穴住居跡は直径6～7m、柱構造は7～9本と大型になります。後期の住居の床には貼床が確認されたことから、建て替えが行われていることもわかり、定住生活への移行が見られます。また、規模の拡大は人口の増加を現していると思われます。住居には溝状遺構が付属しているものがあり（写真8）、住居内の湿気や水を外に排出する意図があったと考えられます。

住居からの出土遺物には、弥生土器、石鎌・石斧・砥石などの石器のほか、紡錘車が見られます。



SB1・SD1 写真8

写真9は弥生時代後期の竪穴住居跡です。この住居は焼失家屋で、炭化した木材が放射状に広がり、その上には大量の焼土が重なっていました。これは火事の時に屋根がそのまま焼け落ちたと考えられ、当時の上屋構造がよく分る例と言えます。出土遺物には、弥生土器のほかに石包丁（写真10）がありました。

高屋東3号遺跡では、住居跡が調査区北側と中央部に集中しているのに対し、土坑墓群は主に南側に分布しています。高屋東2号遺跡が弥生時代



SB6（焼失家屋） 写真9



石包丁出土状況 写真10

から古墳時代にかけての墓であることと考え合わせると、遺跡のある丘陵は墓域と居住区域とを区別していたと考えられます。

この調査によって、遺跡のある丘陵は弥生時代全般にわたって当時の人々が生活していたことが明らかになり、「移動」から「定住」へという変遷を示す貴重な調査例となりました。（恵谷）

財東広島市教育文化振興事業団 文化財センター報

阿岐のまほろば Vol.35

発行日 2007（平成19）年3月26日

発行 財団法人東広島市教育文化振興事業団/文化財センター

編集 東広島市西条町馬木541-1

TEL 082-425-3880 〒739-0033

印刷 大東印刷株式会社

東広島市西条下見五丁目8-17